

熱意の冷めた豊かな社会への対応

第一生命経済研究所 特別顧問 山口 公生

ある人が日本に敬意を抱いている訪問先の国で「日本は戦後高度経済成長を遂げ、欧米に伍して世界第二位の経済大国にまでなった。日本はアジア諸国の見本であり見習いたい。どうしてそれが達成できたのか是非教えてもらいたい。」という質問を受けたが、これに何と答えたら良いか考え込んでしまったとのこと。この話を聞いて、私も正直戸惑ってしまった。

確かにこれから発展を目指すアジア諸国にとっては、日本が輝いていた歴史的事実が自国の今後の発展にとっての関心事であり参考にした気持ちもわかる。日本もかつてそうだった。欧米から人を招き、また視察団を送って学ぶことに努めてきた歴史がある。

しかし、改めてこの問いに答えるとなると、現状に鑑みて気恥ずかしさを覚えると同時に、自ら経験したはずの、先の高度成長期のことすら遠い過去のことのような気がしてきた。正直言って忘れかけている。つい先日のことなのに。

わが国の発展の要素は理屈を言えば、幸運な国際環境や教育水準の高さ、上手く作用した官僚機構、技術導入の巧みさ、インフラ整備、労使協調などいろいろ挙げることが出来るだろう。しかし、一番は豊かになりたいという国民の熱気だったに違いない。

三種の神器（白黒テレビ・洗濯機・冷蔵庫）、三C（カラーテレビ・クーラー・自動車）時代と騒いだ頃が熱気に包まれた時代だ。

行き着いたところがバブルの崩壊だったのだが、その後はこの熱も全く冷めてしまった。

物質的に豊かになったと多くの国民が思い始めたら、経済が成長しなくなるのは当然と思わざるを得ない。例えば、内需拡大策が今後の経済成長に必須だとしきりに言われるが、具体策となると抽象論止まりが多い。

昔に戻るの嫌だが、今の生活が維持できればそれで十分と思えば危機感が社会から消えてしまう。この20年余りがそうだ。

しかし、最近は豊かさを維持するだけでも大変な努力を要することが、じわりと感じられるようになってきた。

経済社会が市場原理を中心に回っていると、大多数が豊かだという時代が格差が目立つ時代に変化するのはい速い。

また、停滞した社会には既得権が容易に根を張り、政治も外交も国民の満ち足りた生活とは縁遠いものになってしまいがちだ。

加えて、わが国には少子化の問題が深刻なうえ、高齢化社会の到来がすでに始まっている。

豊かさは現状維持では保てない。アジア諸国も熱意をもって追いついてくる。

豊かさがほんの一瞬の高度成長の置き土産に過ぎなかったと自覚した時に、初めて数多くの課題が残されていることに気付くようでは子や孫たちに申し訳ない。

そうなる前に、少なくとも課題くらいは国レベルで列挙しておく必要がある。それを国民共通の課題として認識しておきたい。我々は自覚すれば各自が出来る範囲で努力する。

多くの人が豊かさを夢から覚めた後に、熱意が復活し、経済が新しい段階に向かって成長し始める。今回の大震災で数多くの実例を見たように、われわれには共同して我慢強く、希望をもって困難を乗り越える力が依然として備わっていると信じたい。アジア諸国から今も敬意をもたれているくらいだから。

まずは課題認識の共有から始めるしかない。まさに、その課題の絞り込みと重点化こそが政治に期待したい点だ。